

**STAR OCEAN anamnesis -The Beacon of Hope-**

[Novel] 和ヶ原聡司 [Illust] 大熊まい



© 2016-2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved. Developed by tri-Ace Inc.

### 第三章・ランビュランス

その女性は私がこの不可思議な宇宙の旅で出会った人間の中では珍しく『状況にきちんと動揺している』最初の人物であった。

予定航路上にある惑星に向けて航行中に、艦内の紋章反応が高まる警報が鳴り響いた、そして私達が警戒しているところに、突如彼女がブリッジに現れたのだ。

「先ほどの紋章反応は、レクリエーションフロアで発生しました。おそらくまた、リーシュさんが『召喚』を行ったのかと」

コロの返事で一応納得した私は、とりあえず名前を尋ねる。

「ウイニー……と言います。あ、あの、ここは一体どこなんでしょう……？ 何で私、ここにいるんでしょう？」

不思議なことに、フィデルもミュリアもタイネーブも、自分がリーシュに呼ばれたことについて、大きな疑問を抱いている様子が無い。

それだけにこのウイニーという名の女性の反応は、私の目にはとても新鮮に映った。

アカデミックな雰囲気が漂う厚手のコートにスカーフ、蓬髪をシンプルに二つにまとめた姿は、さながら新人紋章術師、という印象だった。

一応どこから来たのか尋ねると、

「呼ばれた、と思うんです」

やはり『呼ばれた』ことだけは共通しているらしい。

「私はその、大学でその日の雑務をこなしていたら、力の高まりを感じました。それで、気付いたらこちらに……あの、ここは一体……」

「あつ、いたいたウイニー。ごめんね、突然で驚いたと思うんだけど」

「あ、リーシュさん」

やはりウイニーは、リーシュとはもう面通しが済んでいるようだ。

「私、何のために呼ばれたんですか？」

戸惑うウイニーにリーシュが告げた目的は、とある生物群の研究であった。

「バーベッド……？」

「つて、私達が呼んでるんだけどね」

バーベッドとは、体中に光る杭が刺さった生物群に我々がつけた呼称だ。

奇妙な施設を発見した惑星メーアを飛び立った我々は、次なる補給地点として惑星エスペランスに着陸した。

エスペランスは、歴史のと文明が斜陽に差し掛かった星であった。

かつては相当に高度な文明が存在していた痕跡が各地に見受けられたものの、私達はそれを維持すべきマンパワーをついに発見することができなかったのだ。

メーアに存在したのと同じ謎の妨害波を発する塔を発見した我々は、エスペランスの妨害波発振塔から更に何か手がかりや艦に流用できる部品を手に入れられないかと探索する。

その結果、エスペランスの人類が滅びかけている原因の一つと、エスペランスとメーアの妨害波発振塔の建設は同一の勢力の手によるものではないかと予測した。

そしてエスペランスにもエスペランス固有生物種に光の杭が刺さったバーベッド形態が存在すること。更にエスペランスのバーベッドは、外見や生物系統が異なっているにも関わらず、遺伝情報が完全に統一化されたものであったということだった。

「外見も生物種も全く違う系統に属するのに、同じ遺伝情報を持ち、複数惑星に跨り生息する、光る杭が刺さった生物群ですか。それは……面白そうですね」

普通に考えれば生物学的にグロテスク過ぎる状況なのだが、ウイニーは穏やかな雰囲気に戻して、未知の事象に対し貪欲な知識欲を持っているようだ。

「私が選ばれた訳は分かりました。研究環境は整っていきそうですし、お力になればと思います。若輩の身ですが、これでも研究者として身を立っています。よろしくお願いします」

「よろしく願います、あなたは一体どこから選ばれたのですか？」

どこまでも爽やかな笑顔でフィデルがそう問うと、ウイニーは少しだけ困ったような顔になった。

これもまた、今までリーシュと呼ばれた者達には無かった特徴だった。

「その……何と言えればいいか、きっと話しても、分かっていただけだと思います」

「大丈夫ですよ！ 私はウチユウのことも自分のホシのことも全く分かってませんが、なんとかなってます！」

元氣いっぱい、頭は空っぽな発言で艦橋に笑いを誘ったタイネーブの言葉も、ウイニーの表情を和らげはしなかったが、それでも答えを引き出すことはできた。

ウイニーが元いたその星の名をリーシュもフィデルも、ミュリアもタイネーブも知らなかった。

だが、私はその名を聞いて心臓が口から飛び出そうになったし、我が艦の優秀なAIもきつと同種の衝撃を受けているのではと思う。

「私の故郷は、もはや星ではありません、エナジーネードと呼ばれる宇宙の監獄。その中のギヴァウェイという街にある大学で、教鞭を取っていました」

「お休みのところ申し訳ありません、艦長。少しお時間よろしいでしょうか」

就寝時間に、らしくもなく私の私室に謙虚な態度で入ってきた、全く謙虚でない顔つきのコロが言い出すであろう話は分かっていた。

ウイニーのことかと先回りして尋ねると、コロは全身を傾けて器用に頷いた。

「あの日宇宙基地を出発して以来訳の分からないことの連続でしたが、今日ほど訳が分からないことは無いと思います」

私も重々しく頷いた。

「リーシュさんは、宇宙のどこから人間を呼び出す紋章術を行使できる。それ自体もおかしなことですが、その力が我々に大きな力をもたらしている以上、どうこう言うことはできません。ですが……ウイニーさんの件は、少々議論が必要だと感じました」

コロの言いたいことは、私もよく分かっている。いや、一般的な教育を受けた今の銀河連邦に所属する人間なら、おかしいと全員が思うはずだ。

フィデルがウイニーの話に違和感を抱かなかったのは、単純にまだフィデルの連邦史への理解が浅いからだろう。

「ウイニーさんが嘘をついているという可能性は」

無いだろうと思う。

そんな嘘を吐いたところで、現代の銀河連邦軍人の中に信じる者などいない。

だがウイニーが嘘を吐いていないのだとしたら、リーシュの力がこれまで以上に訳の分からないものになってくる。

エナジーネーデ。

その天体の名は、今も連邦全宙域に大きな影響力を持つ地球、エクスペル、テトラジェネシスといった銀河連邦常任理事国の歴史に於いて、欠くべからざるものである。

そしてエナジーネーデが現代のこの宇宙に存在しないことは、既に一般常識だ。

だがウイニーは、そのエナジーネーデから来たという。

「エナジーネーデが宇宙から消えたのは200年も前のことです。ウイニーさんが本当のことを仰っているなら……個体名、イヴリーシュさんの力は……艦長」

私はコロの言葉を途中で止めた。

確かに、リーシュの力や言葉には奇妙な点が多くある。

だが現状、リーシュの力は私達の助けになっており、リーシュ本人も、いつそ分かりやすいほどに真っ直ぐなものだ。

それら全てが完璧な演技だったのなら、それはもう仕方がない。

私達は既に彼女と彼女が呼び出した者達をこの艦の一員と認めている。

ならば、今はこれ以上何も言うことは無い。

「……分かりました。艦長がそう仰るのなら僕は何も言いません」

こういうところでは妙に冷静で上官たる私の言葉に忠実なところは、まあ、キモかわいいと思わないでもない。

私はコロが私の意を汲んでくれたことと確信して、予め準備していたマシンオイルを取り出して差し出してやった。

それを見た途端コロは比喩でなく目の色を変えて飛び上がった。具体的には赤と緑だった。「こっ、これはもしかしくなくても、エクスペルはリング産のピュアプレミアムマシノイルではっ!? や、やだなあ艦長、こ、こんなものを渡されなくても僕は艦長の言うことには黙って従いますっばうへへへいやあもう艦長も悪いお人ですねえ！」

軍規に抵触してはまずいので、いつも頑張ってくれている報酬だ、とだけ言うと、コロは奇声を上げながら私の部屋を飛び出して行った。

「コロ？ 気持ち悪い声と油まき散らして一体どうしたの？」

「へへっ、報酬ですっばよりーシュさん！」

「は？ ……一体何なのかしら？ あ、艦長、丁度良かった。さっき気持ち悪い声上げてるコロが向こうに……じゃない、ミュリアが呼んでるわ。次の良さそうな星が見つかったみたい。ブリッジに来てくれてっ！」

コロが出て行ったドアからそのまま覗き込んできたのはリーシュだった。

「な、なに？ どうしたの艦長」

覗き込むリーシュの顔を、しばし見つめる。

奇妙なことは沢山ある。

だがそれでも彼女の不思議な色合いの瞳の奥には真っ直ぐな正義感が灯す強い意志の光が宿り、気が強いのに変なところで遠慮がちで、それでも困っている人のために動かすにはおれない。

リーシュはそんな『ごく普通の』勇氣ある女性で、今はそれ以上でも以下でもない。

「黙り込んでどうしたのよ。顔に何かついてる？」

何でも無い、とだけ告げてから、私は壁にかけられていた制帽を被り直し、大切な仲間の招請に従って艦の指揮を執るために艦橋へと戻る。

するとミュリアが怪訝な顔で私を出迎えた。

「艦長、さっき突然コロの演算がもの凄く早くなったんだけど、故障じゃないかしら」

「故障とはなんですかミュリアさん！ 僕は今、元氣千倍ファイト一万発なんですよ！」

「やっぱり故障ね」

「ミュリアさああああん!？」

「艦長、なんか床をコロが這いずり回った跡が油だらけで大変なことになってるんですが！ 今タイネーブが足を滑らせて転んじやって！」

そこにフィデルが凶報を抱えて駆け込んできたため、コロはもはや恒例となったミュリアからの雷のおしおきを食らったのであった。

※

「この星には、巨大な都市群が大量にあります。先進文明を持っていそうです」

少しだけ元気が無くなりようやくいつものテンションに戻ったコロが、スクリーンに映し出された惑星についてのデータを述べる。

「センサーが人工衛星の存在を感じたわ。でも色々な電磁波を簡易スキャンすると、惑星全体を覆うような警戒網は存在しないみたい」

「そうですね。文明の進歩にも地域差が見受けられます。最初の着陸は、大都市圏を外した方がよいかもしれませんね」

「フィデルさん、ジンコウエイセイって何ですか？」

「えっ？ ううんと……何て言えばいいかな。月みたいに星の周囲を回って、地上の活動の手伝いをするための機械、かな。天気を見たり、地図を描いたりできるんだ」

「へえ〜」

タイネーブの質問に答えるフィデルの解説は、先進文明を未開惑星出身者に説明するのに非常に適していた。

彼自身が文明進歩ギャップの狭間にいるが故の自然な配慮だろう。

それだけでも彼が、フェイクリードと連邦を結ぶ良き使者となるだろうと思っていると、艦の研究分析室、つまりはラボにいるウイニーから通信が入った。

『もし降りるんでしたら、出来たらで構わないので少し試薬や実験機材になりそうなものを手に入れてきていただけませんか？ この艦の設備は素晴らしいんですが、アナログな道具も使って実験したいんです』

「艦長、どうされますか？ 文明レベルは最低でも地球の21世紀レベル。これまでで最も効率よく資材や素材が手に入る惑星かと思われれます。話の持って行き方次第では、この艦を入れてくれるドックがあったりなんかして……!」

ドック修理は流石に甘すぎる見込みだとは思いますが、確かにそろそろ人工的な素材や部品の補給が必要になってくると感じてはいた。

それに、これからまたリーシュの『召喚』によって艦のクルーが増える可能性は否定できない。

物資は余剰気味なくらいで丁度いいと思われた。

私はコロとミュリアに、目の前の惑星への着艦を指示する。

「分かったわ。いくつかの通信を傍受したけど、原住民はこの星を『ファブリーク』と呼んでいるみたい」

「惑星、ファブリーク」

操艦には口出しをしないリーシュが、ミュリアの呼ぶ名を口の中で反芻する。

「どんな星なのかしら。楽しみね」

リーシュはメーアの時もエスペランスの時も、着艦直前、まるで子供のように目を輝

かせていた。

メーアやエスペランスでは予想外の事態に巻き込まれたが、ここでは可能な限り平和に過ごしたいなどと思いつながら、我が艦は惑星フアブリークへの着陸シークエンスに入る。

そして、その僅か数分後、そんな考えは連邦軍人として極めて甘かったと、思い知らされることになったのだった。

『おい、ついてるぜ。あのシケた街のアガリなんかメじゃねえ、あの船襲ってバラしやあすげえ金になりそうだけ』

『戦利品は、苦勞する俺達の山分けで問題ないな？ そうだよな？』

『ああ！ 上納金は街や集落を襲ったときのアガリだけって決まりだ。落とし物を拾ったって届ける警吏もいやしねえ。俺達反政府ゲリラの正義の戦士達で有効活用してやろうぜ』

『いい武器があるといいなあ。街での仕事やしやすくなる』

『とはいえ、油断はすんな。見たことねえ形だ。万一塔の連中の気配を感じたらすぐに引け。そうでなければ、がつつり奪え、いいな』

『おうよ。それじゃ、おっ始めようぜ！』

欲望と浅慮が混然一体となった野卑な会話の記録が終了し、艦橋は暗い空気に包まれる。

「以上が、先ほどの襲撃の直前に艦のセンサーが拾っていた音声データです」

コロが告げた通り、我々の艦は、大気圏に突入し人里離れた平原に着陸しようとした瞬間、何者かから襲撃を受けたのだ。

「盗賊団のような連中だったってことですか」

フィデルの問いに、ミュリアが首を横に振る。

「品性は盗賊団と大差ないけど、自分達で反政府ゲリラって言う以上、そこそこ組織された集団でしょうね。食い詰めた盗賊団というよりイカれた過激派って感じ」

襲い来る盗賊団を一掃したのは、ミュリアの雷の紋章術だった。

戦闘艦の主砲を人間に向けるわけにはいかないが、シールドがあるとはいえ、艦体を攻撃されっぱなしというわけにはいかない。

とはいえ私とフィデルとタイネーブが迎撃するにはいささか数が多かった。

そこを颯爽とミュリアが艦を降り、空を覆う雷の雨を降らせ、襲撃者の集団を一掃してしまっただのだ。

「これじゃあ艦をドックに入れるどころか、私達が棺桶に片足突っ込むことになるわ」  
ミュリアの声は厳しい。

フィデルもタイネーブも、新しい資材を欲しいと言ったウイニーも、何も言わない。

メーアやエスペランスの状況に介入を主張したリーシュすらも。

「でもこの星は、詳しく探索する価値があると思う」

だが意外にも、今回はミュリアの側からアクセルを踏んできた。

「えっ？」

「ど、どうしてですかミュリアさん！？ 僕はすぐに逃げるべきだと思うんですけど！」

「今の音声データ、聞いてなかったの？」

ミュリアは、再び音声データを再生する。

『塔の連中の気配を感じたらすぐに引け』

ゲリラの一人の言葉だ。

「塔……塔の連中……？」

リーシュがはつと顔を上げると、ミュリアは頷いた。

「これまでの星と違ってかなり微弱だけど、例の妨害波と同じ周波数を検知したわ。同時に、これまでほど大規模じゃないけど、大きな鉱脈があるわけでもないのにこの周辺には不自然な地下空洞がいくつかあるの。まるで試し掘りをしたみたいな、ね」

「塔、妨害波、地下空洞……それってまさか！！」

「ええ、そうよ」

ミュリアは大きく頷いた。

「このファブリックでは、今まさに、あの塔が本格的に建設されている最中なんじゃないかしら。そしてゲリラたちは『塔の連中』を恐れている。つまり……」

「宇宙を渡って未開惑星に勝手に変な塔を建設している奴らが今、僕らのすぐ近くにいる、ってことですね」

「そういうことよ。どうする？ 艦長」

そこで私に話を振るのはずるいと思う。

一斉に私に向いた視線を、決意とともに受け止めた。

「そこまで条件が整っているのなら、やるしかないではないか。」

「艦長……ありがとう！」

なぜリーシュが礼を言うのか、などと野暮なことを言うつもりはない。

それが、リーシュという女性なのだ。

私は一瞬だけコロに目配せすると、コロも少し逡巡してから小さく頷いた。

とはいえ、今度相手にするのはこれまでのような野生の現生生物ではなく、我々への害意を持った人間だ。

探索を行うには、これまでに以上に慎重さが求められる。

「隠密行動は私の得意分野です。お任せ下さい！」

元氣よくタイネーブが立候補し、

「私も行きたいわ。前の二つの星ではどっちも艦で留守番だったから、そろそろ体を動かし



たいの。二人で行く？」

「ミュリアさんは、隠密作戦の経験があるのですか？」

「あなたみたいな専門家じゃあないけどね」

ミュリアは髪をかき上げながら、それでも余裕の笑みを浮かべた。

「それでも相手はヒューマン、場所はどこに逃げても大気のある惑星地表よ。生命倫理や構造哲学が根本的に違うカルディアノン母艦に侵入したときに比べればなんてことはないわ」

「カルディアノンって、知的生物種の進化論講座で聞いたことがあるような……確か、爬虫類種の進化系統だった気が……うう、研究室の辞書があればなあ」

ウィニーが記憶を探るような仕草をする間に、ミュリアはいつの間にか、モーフィスの戦士伝統の武具であるという杖を取り出した。

「探索には私とタイネーブだけで行くわ。さっきの連中はきちんと痛めつけておいたから戻ってくることは無いと思うけど、他のゲリラに襲われなくても限らない。艦長達は艦の防衛をお願いね」

ミュリアはコロとの通信端末を私と同じように自分の服の襟元につけると、自信に満ちた背中を見せ、タイネーブと共に艦を降りていった。

「二人だけで、大丈夫かしら」

「大丈夫だよ。リーシュ」

二人を不安げに見送るリーシュを元気づけるように肩に手をかけ、フィデルは言った。

「二人とも、実力は本物だ。仲間を信じて、今は待とう」

「……そうね、ありがとう、フィデル」

フィデルがリーシュの不安を取り除いてくれたことに満足しながら、とりあえず艦長席に座って待機状態に入ろうとすると、

「ああいうことは、艦長の口からきちんと言ってあげるべきでは？」

足元から、コロのねっとりした囁きが這い上がってきて私は思わず飛びのいてしまった。

私はコロとフィデルとリーシュを見比べながら、なるほど、フィデルのあまりに好青年らしいその台詞に、若干の嫉妬を覚えないでもない。

だが、私と同じことを言い同じことをしても、稼げるポイントはきっとセクハラポイントだけな気がする。

「あっ！ それもそうですね！ ああんっ!？」

あっけらかんと言つてのけるコロを爪先で小突くくらい、今は許されるだろう。

※

政情が不安定な国というのは、国家権力側も反抗勢力側も末端の綱紀が緩むものだ。

『反政府ゲリラ』は響きこそ物騒ではあるが、この星に来たばかりの我々には政府と反政府のどちらに理や義があるのかは判断できない。

反政府ゲリラ側の言動は確かに荒っぽいものではあったし無法を見逃せとは言わないが、極力争いへの介入を避けるようミュリアとタイネーブには厳命した。

『努力するわ』

ミュリアの返答は、現場の判断を優先する、と言っているようにしか聞こえなかったし、『艦長、すいません、早速』

やや遠い声で、タイネーブが苦笑しながら謝ると同時に派手な音が聞こえて来て、私は小さく溜め息を吐いた。

「あの、艦長、いいんですか、これ」

フィデルが言いたいことは分かる。

ミュリアとタイネーブがどちらの勢力と接触したかは分からないが、政情不安定な国に降り立った挙句に政争に介入して大暴れ、というのは思い切り未開惑星保護条約違反に見える。

「まーそのー……この場合、限りなくクロに近いグレーと言いますか」

クロが言いにくそうにそう言うのを、私が補足する。

未開惑星保護条約が規定する惑星の状態は、先進惑星、未開惑星の他にもう一つ、監視対象惑星、というものがある。

監視対象惑星は法解釈次第で適用できる星が限りなく増えてしまうため、常に法学論争に晒されているが、先進惑星と未開惑星の間にある星と考えて差し支えない。

一応監視対象惑星に該当すると認められる具体的な要件は、以下のようになっている。

『惑星独自の技術を用いて宇宙進出を果たしている』

『惑星独自の技術を用いて惑星が属する恒星系を脱出できない』

『通信行為等により積極的に先進惑星に接触できる』

『やむを得ない事情により先進惑星の干渉を受けている』

『やむを得ない事情により先進惑星の干渉を独自に排除できない』

『その他、監視対象惑星として認められる特段の事情がある場合』

このように規定されており、判例からこのうち3つ以上を満たしていると監視対象惑星として認められる。

ファブリークには人工衛星を運用する技術があるが、恒星系外から接近した我が艦に対し一切のコンタクトが無かったことから、宇宙進出は衛星軌道上に限定されているようだ。

更に、問題の妨害波発振塔は明らかに先進惑星の技術によるものであり、それがこの星の上にあるということは、ファブリークは何らかの事情で先進惑星の干渉を受けており、自力ではその影響を排除できないようだ。

「以上のことからファブリークは監視対象惑星と呼ぶことができ、監視対象惑星は準先進

惑星のような扱いを受けることがあり、このファブリークが、その一、将来的に連邦に与える影響を考慮した場合、当該惑星の公共の福祉に資する必要最低限の干渉は認められる傾向にありえーと、つまり……」

「つまりは、状況に直面した人間の判断でどうしても解釈できる、つてことですね」

コロと私のはつきりしない解説に、小さく肩を竦めたのはウイニーだった。

穏やかな性質の女性だが、このときのウイニーの表情には、はつきりと厳しい意志が宿っていた。

「ウイニー？ どうしたの？」

リーシュが驚いて尋ねるが、ウイニーはコロと私を順に見て、口を開く。

「こんなことを艦長に言っても仕方がないとは分かっています。でも、その曖昧さを積み重ねて行けば、たどり着く結末はきっと良くないものになりますよ」

「ウイニーさん？」

コロも、そしてリーシュもフィデルも、ウイニーの悲しみすら纏ったその言葉に戸惑った。

「将来、その曖昧さを利用して権力や勢力を伸ばす人達が必ず現れます。その人達は元からルールは守るのではなく利用するためかと思っっている人達で、気付いたときにはその人達が組織の在り方を根本まで歪めます。その歪みを放置して積み重ね続ければ……破滅は、悲惨なものになります。私は艦長達に、そうなってほしくありません」

何か、具体的な事例を知っているのだろうか。

「私は、歪んだ歴史からいつまでも逃げ回るだけの歴史の終端に生まれましたから」

歴史の終端、と聞いて、私ははっとする。

それと同時に、ウイニーがエナジーネードからやってきたという事実が、今の一連の発言にとつともなく重い意味を持たせることに気づき、言葉を失った。

ウイニーの方も、言い過ぎたと感じたのか、憑き物が落ちたようにはっと顔を上げて、

「すいません、出過ぎたことを。任されていた作業に戻ります」

小さく礼をして、艦橋を出て行ってしまった。

「ウイニー、ちょ、ちよっと待って」

ウイニーが気分を害したと思ったのか、リーシュが後を追って艦橋から出て行く。

二人がいなくなつたあと、フィデルがぼつりと呟いた。

「僕はまだ連邦史をほとんど学べていないんですが、艦長は何か御存知なんですか」

その問いに、私はどう答えるべきか悩んでいた。

明らかになっている事情だけでも、エナジーネードにまつわる歴史は一言で語れるようなものではない。

しかも、エナジーネードのグヴァウェイという街にある大学で教鞭を取っていた、という事実が、ただでさえ重い事情を更に重くする。

私は逡巡した末に、どうしても知りたければ、という前置きをしてから告げる。

コロのデータベースにアクセスし『十賢者事変』と『十二英雄』について検索しろ、と。

「ジュッケンジャジヘンのジュウニエイユウ……」

私は曖昧に頷くだけに留めると、気持ちを切り替えるようにミュリアとタイネーブの現状を確認する。

二人の座標は、今の僅かな間になんり離れた場所に移動していた。

「どうやら、反政府ゲリラの一派から乗り物を奪ったようです。タイネーブさんがゲリラの一人をその、命の危険が無い程度にあれやこれやしまして、あの、艦長、タイネーブさん相手にセクハラポイント稼ぐときつと大変なことにあいたあああっ！」

人をセクハラ常習犯のように言うAIにはおしおきである。

『艦長、こっちは順調よ。例の塔の建設現場までもう少しで到着するわ。ついでに面白いモノ拾ったの。地下空洞の理由が少し分かったわ』

風切り音とエンジン音に混じって、ミュリアの報告が入る。

『ほらあ、もう一度話してください？ 一体何のためにあの塔を建ててえ、何のために地面を掘ってるんですかあ？』

「[……]」

私とフィデルとコロは揃って沈黙し、目を見合わせる。

どうやらミュリアが運転しているらしい乗り物には、タイネーブ以外に『面白いモノ』として拾われた誰かが乗っているようだ。

そしてその誰かは、気の毒にミュリアとタイネーブに拘束されているらしい。

そして聞こえてきたタイネーブの声色は、艦で見る元気で勝気な明るい様子と打って変わって明らかに普段と違っており、優しく柔らかい口調とは裏腹にどうしようもない冷たさを感じさせた。

命の危険が無い程度に一体あれやこれや何をしたのか、あまり想像したくない。

『……あれは、あの塔は、パルスタワーは……その、特殊な磁場を発生させて、地面の成分を変質させるって、俺は聞いてて……』

やがて怯えきった男の声が聞こえて来た。

『何でもねえ土や岩が、レアメタルに代わるって、それで俺達の、上の方が、金になるって、奴らに協力して……代わりにいくらかレアメタルを横流しして、装備買ったりして』

『なるほどお。そうやって手に入れた金で買った装備で村や街を襲ってえ、女の人をさらったりい、お年寄りを殺そうとするわけですねえ。そうですかそうですかあ。へええええ？』

『や、やめてくれええええ！ 悪かった！ 悪かったと思ってるよおおお！ 俺だって命令で仕方なく……！ 知ってることは話してるじゃねえかあああ！』

「岩がレアメタルに……？ 連邦のレプリケーターに関する技術に、そんなシステムがあつ

たはずですが、恐ろしい量の磁気やらなにやら出まくりで滅茶苦茶危険だった気が……」

通信越しですら背筋が凍るようなタイネーブの声色と、怯えきって泣き出す男の声は聞かなかったことにして、私達は流れてくる情報を整理することに徹する。

『と、塔が建てば政府軍を攪乱できつから反政府ゲリラみんなで協力してんだよ！俺達の通信機もイカれちまうけど、レアメタルをもらえりゃお釣りが出た！』

『さつきから協力協力してしつこいですけどお、自分達は主犯じゃないと言いたげですわねえ』  
『そ、それはだって、本当に俺達の技術じゃあんなもの作れるわけねえだろ！本当だよ！パルスタワーを作ったのは俺達のクライアントで、でもでも！俺みたいな末端はそのクライアントの正体なんて知らねえんだ！すげえ船や技術を持つてるのを遠くから見ただとあるだけで、俺は奴らと話したことすらない！本当だ！本当だよ！本当にこれ以上知らねえんだ！塔には案内する！仲間だって売る！だからこれ以上は勘弁してくれえええええ……！』

捕えられたゲリラの仲間を売るとまで叫んだ声が悲痛すぎて、少し可哀想になってきた。

その後は男のすすり泣く声だけが数秒続き、やがてタイネーブのため息が小さく挟まれる。

『ふう……どうやらこれ以上は聞けそうにないですね。艦長。今私達が手に入れられる情報はこれくらいです。参考になればいいんですが』

十分すぎるほど参考になりました、と答えると、タイネーブはいつも通りの口調に戻って尋ね返してきた。

『艦長？ どうしたんですか？』

『あなたの手に感心しているのよタイネーブ。そうでしょう艦長？』

ミュリアが、こつちがビビってしまったことを全部見通した上でそんなことを言ってくるのだから、そうだとしか返しようがないではないか。

『いやあ、実は普段組んでる同僚の子のマネしてみただけなんですよ。あの子ならもつと効率よく吐かせてると思いますし、上司ならもつとだと思えます。私はむしろこういうの苦手な方で、まだまだ精進あるのみです』

謙遜は結構だが、荒くれ者の反政府ゲリラの精神をタイネーブより効率的に破壊して自白させる人物を『同僚の子』や『上司』などという柔らかな表現で説明して良いものか。

『私達はもうすぐパルスタワーとやらに到着するわ。着いたらまた連絡するわね』

ミュリア達からの通信が切れ、艦橋の男達の間にはいわく言い難い空気が残る。

『パルスタワー、って、つまりメーアやエスペランスにもあったあの塔ですよね』

『そうだと思います』

最初に口火を切ったのはフィデルだった。やはりできる男だ。

『今のお気の毒なゲリラの男性が言うことが真実なら……』

コロすら、少しだけゲリラの男に同情しているような声色なのだから困ったものだ。

「妨害波の発振は副次的なものであり、パルスタワーとやらの建造の目的は、土壤改造とレアメタルの収集ということでしょうか。いえ、むしろ土壤変性時に発生する超磁界がそのまま妨害波として影響しているのかもしれませんが」

「エスペランスの生物の遺伝子がおかしかったこともその影響だろうか」

「土壤変性機能と超磁界が生物の遺伝情報に何らかの影響を与えたと推察できます。ですがいくらパルスタワーのエネルギーが強力だったとはいえ、惑星全土の生物相を丸ごと同一の遺伝子で染めるような波及力があるかどうかは疑問が残りますね。ウイニーさんが最初に出して下さったレポートと照らし合わせても、エスペランスの件は今保留するべきでしょう」  
確かにパルスタワーと遺伝子同一化の因果関係を証明するには今ある材料では全く不足しているし、更にはバーベッドとの因果関係も不明なままだ。

バーベッド化している生物とそうでない生物の差異の研究もまだまだこれからである。

今フアブリークで我々が考えるべきは、この星、もつと言えばミュリアとタイネーブが向かう先に、パルスタワーを建設した何者かがいる、ということである。

そいつらは未開惑星の資源を盗掘し、今また新たな星を餌食にしようとしている。

ウイニーが言うことも分からないではないが、やはりこの現実には直面した私達には、もはやパルスタワーを作った者達を止めないという選択肢は選べないのだ。

『艦長』

そこに、ミュリアから再び通信が入る。パルスタワーに到着したのだろうか。

『少し面倒なことになっているの。一度そちらに戻ることにするわ。詳しいことは帰ってから話すけど、私とタイネーブだけじゃどうにもならない事態が発生したわ』

私達は目を見開いて顔を見合わせる。先ほどまではこのままパルスタワーに殴り込んで塔を根こそぎ引っこ抜きかねない勢いだったのに。

答えは、すぐにやってきました。

『反政府ゲリラのクライアントは先進惑星の正規軍よ。私達二人では、手に余るわ』

※

オフロードカーに乗って帰ってきたミュリアとタイネーブは、一見して激しい戦闘が起ったことが分かるほど砂埃にまみれていた。

擦り傷程度ではあるが僅かながら負傷の跡も見られたので、まずは入浴と治療を進めてみるが、ミュリアは報告を終えてからにしたいと、艦の全員を艦橋に集合させた。

「先進惑星の正規軍って、それ、本当なの？」

「コロ、映像記録出して」

リーシュの問いに、ミュリアはコロに指示を出して答える。

「これが、道中で私達が交戦したゲリラ。それで、こっちが例の妨害波発振塔、パルスタワーにいた連中」

映像の中の反政府ゲリラの装備は全く統一されておらず、一部フアブリークの文明レベルに見合わぬ装備も散見されるものの、如何にも野戦軍、という印象が拭えない。

一方でパルスタワーを警備する兵は、頭の上から爪先まで、はつきりと先進惑星製品と分かる装備で身を固めていた。

ゲリラより圧倒的に人数が少ないにも関わらず、場を支配しているのは明らかに彼ら側だ。

「私達が退いた理由は彼らの装備とパルスタワーにあるわ」

「装備？」

「彼らのライフル、これ、ゲリラのと同じ実弾銃【フェイザー】に見えるけど、何らかの特  
殊な技術が組み込まれた武器よ。紋章術か、戦艦搭載の光学兵器を小型化したものか……」

「えっ？ それが撤退の理由だったんですか？」

この発言に驚いたのは、コロだった。

「そうよ。携行可能な光学兵器なんて、そうそうあるものじゃな……」

「え、いえ、連邦じゃ標準装備ですし、さほど珍しいものではないんですが」

「……どうということ？」

ミュリアの表情が、途端に怪訝なものになる。

「いえ、どうということもなにも、そのままです。彼らが携行しているのは高出力のフェイズガンだと思われま。艦長のお持ちのものよりは威力と有効射程があるとは思いますが、皆さんにとつてそこまで脅威かと言われると……いや、そりゃ当たれば痛いでしょうけどね」

「私をからかっているんなら、後が怖いわよ？」

険が籠っている、と言うよりどこか戸惑った様子のミュリア。

コロはあわわ雷はご勘弁と悲鳴を上げるが、それでも訂正はしない。

「第一、これまで艦長はずっとその携行可能な光学兵器で戦ってきてるんですよ？ ミュリ

アさんも何度も見ているでしょう？」

「そう……だったかしら」

私もコロの言うことが正しいと告げると、ミュリアはより困惑顔になった。

確かに私とミュリアは、出会って以降、同じ場所で戦闘行動を取ったことはなかった。

今更だが彼女は私がフェイズガンを撃つところを見たことがないのかもしれない。

だとしても、結局彼女がフェイズガンを知らないことには変わりはなく、私は混乱する。

ここまで艦のオペレーターをつつがなく勤め、先進惑星人として大いに活躍してきたはずのミュリアが、中距離用フェイズガン一つでここまで動揺するとはどういうことだろうか。

「……何だか、妙な感じね。私はおかしなことを言ってるのかしら」

「いいえ、多分おかしくないだと思います」

すると、ウイニーが控えめに、だがはつきりとそう言った。

「多分、ミュリアさんは本当に知らないんだと思います。いえ、私の推測が正しければ知っているはずがない、という方が正しい気がします」

「どういうこと、ウイニー」

「すいません、これ以上はまだ私にも確証は……ただ、記憶が無いというリーシュさんの力が、より超常的なものである、ということだけは間違いないと思います」

「えっ？ あたし！？ 今あたし何かした？」

突然話を振られて驚く当たり、一体どこまで本気なのか……。

リーシュの態度が硬化した空気を和らげ、ウイニーは嘆息し、ミュリアも首を振る。

「とにかく、私もそうだし、先進惑星文明に疎いタイネーブにとっても強行突破は危険だと判断したわ。問題のパルスタワーもかなり大きくて、潜入するにも人手がいるわ」

「時間をかけてじっくり調べるって言うのはこの場合無しでしょうしね。何度も潜入する危険は冒せないし、かといって艦の位置はゲリラにはばれてしまっている」

「フィデルの言う通りよ。艦長、あなた、潜入任務や諜報活動の経験は？」

問われて私は正直に首を横に振る。

座学として概要を学んだことはあるが、潜入も諜報も長期にわたる専門の訓練が必要だ。

そしてその経験が豊富らしいミュリアとタイネーブが撤退する場所に、私が付け焼刃で潜入できるとはとても思えない。

正面突破するにしても、あの人数相手では囲まれてハチの巣にされて終わりである。

「……それで、帰る間にミュリアさんとも相談したんですけど、ゲリラの人が、こんなものを持ってたんです」

「それは……！」

リーシュが息を呑み、フィデルとコロも目を見張る。

驚きこそしたものの、同時に心のどこかでそれを予想している自分がいた。

タイネーブの手にあるのは、あの不思議な輝きを宿した、紋章が刻まれた石だったのだ。

「これで、どうにかありませんか？」

リーシュは、タイネーブが差し出す石をおずおずと受け取り、やや引き攣った笑顔になる。

「その、あたしも自分でよく分かってないけど、あたしの紋章術は、都合よく今の状況を打開してくれる便利な人を必ず呼べるわけじゃないんだからね？ 期待と違う人が現れても、その人責めたりしないでね？」

「そんなことしないわよ。それで、できそう？」

プレッシャーこそ感じているようだが、それでもリーシュに迷いは無かった。

「あたしに任せて！」



窮地に陥る人々を救いたいと願うリーシュの迷いの無さが、その奇跡を生んだのだろうか。レクリエーションルームには紋章の刻まれた石が浮かび、立ち上る光の柱は虹色であった。「……っっ!!」

空間に走った亀裂から放射された虹の麓に現れた人影を見て、タイネーブが大きく息を呑み、両手で自分の口を押さえる。

ミュリアと年代と思しき女性だった。

伸びやかな肢体を包むのは、洗練された隠密服。

タイネーブのものと同じ素材で出来ている青藍色のマフラーに、短く切りそろえられた燃えるような紅の前髪から覗くのは、剣の刃を思わせる鋭い視線。

タイネーブは、既に駆けだしていた。

現れた女性も、すぐにタイネーブを認めて彼女を迎え入れる。

「ネル様っ!!」

タイネーブの声が響き、ネルと呼ばれた女性は、涙を浮かべるタイネーブを抱き止めて微笑んだ。

「小さな子供みたいな声を上げて、みっともないよ、タイネーブ」

伶俐で穏やかな声色と笑顔でたしなめられ、タイネーブははっと顔を赤らめ姿勢を正す。

「も、申し訳ありません！ 取り乱しました！」

「私に会って取り乱すくらいに喜んでくれるなら、悪い気はしないけどね。喜びついでに、ここがどこで、彼らが何者なのか教えてくれるかい？」

「はいっ！ リーシュさんリーシュさん！ 凄いです！ ドンピシャです！」

「はあ……はあ……え？ 何が？」

召喚の紋章術の疲労によるものか、少し息を切らしたリーシュはタイネーブの異様なハイテンションに目を丸くしている。

「リーシュさん、艦長！ こちらは聖王国シーハーツが誇る最高の隠密、クリムゾンブレイドにして封魔師団『闇』師団長でもあるネル・ゼルファー様です！！ ミュリアさん！ もう私達はパルスタワーを攻略したも同然です！！ そしてネル様、ここはファブリークという星だそうです！ ほら、例の宇宙って所にある！！」

「タイネーブ」

喜びを抑えられないのか、その場で小さくジャンプしているタイネーブに前後から声がかかる。

「タイネーブ、あなたが嬉しいのは分かるけど、もう少し落ち着いて説明して頂戴。私達はあなたの国のことをよく知らないから、その人の凄さが伝わらないわ」

「タイネーブ、いい加減落ち着きな。説明が唐突過ぎてちよっつについていけない」

ミュリアとネル、双方からツツコミを受けて、タイネーブははっと我に返り、ようやくネルと私を引き合わせてくれた。

「あんたがここの司令官なんだね。私の部下が先走ってしまったけど、改めて自己紹介させてもらうよ。私はネル・ゼルファー。聖王国シーハーツの隠密だ」

改めてネルと名乗った女性は、右手を握って左胸の前に掲げる。

隣でタイネーブが同じ姿勢を取ったことで、これが彼女達の故郷である聖王国シーハーツの敬礼なのだろうと察した私は、地球流の敬礼を返した。

司令官と言うほど大層な身分ではないが、私達が今いるこの場所は、正確には惑星に着陸している航宙艦の内部であり、自分が責任者を務めていることを告げた。

「状況はよく分からないけど、私が必要とされてここにいることは、何となく分かる。タイネーブが言うほど大げさじゃないが、役に立てることはあると思う。以後よろしく、艦長」

戦闘技術と諜報技術が群を抜いているタイネーブが、目だけでゲリラを自白させられると形容した上司とは、もしかしなくてもこのネルのことだろう。

私はリーシュを艦に招き入れてからの戦歴とファブリークの現状を掻い摘んで説明すると、ネルは得たりと頷いた。

「なるほどね。リーシュの施術、いや、あんた達流に言えば紋章術か。その紋章術で私が呼ばれた理由は分かった。先進惑星の武装がたつぷりの謎の施設に潜入とはね」

ミュリア達が収集した情報やパルスタワーを守る謎の先進惑星兵の武装を見たネルはしばし考えてから、レクリエーションルームに集ったこの艦の乗員全員をさつと見回す。

「艦長とフィデル、それからリーシュ、私と一緒に来てくれるかい。ミュリアとウイニーは私達が送るデータを解析して、こちらにフィードバックしてほしい」

「え？ あたしも？」

「え？ 私は？」

私とフィデルは頷くだけだったが、リーシュとタイネーブが、それぞれ全く別ベクトルで疑問の声を上げた。

「こいつらが持つてるのはフェイズガンとか、パルスライフルとか呼ばれる武器だ。独特の挙動を知っていないと攻撃を回避するのは難しい。タイネーブ、あんたはバンデーン航宙艦が聖殿カナンに落ちたとき、アリアスにいたから戦い方を知らないだろう。ここは私に任せて、この艦を守ることに専念してほしい」

「は、はい！ 了解しました！」

「んん？ あれ？」

足元でコロが疑問の声を上げたおかげで、ネルとタイネーブの会話の極めて不自然な部分を聞き逃さずに済んだ。

タイネーブの上官であるなら、ネルも未開惑星出身のはずだ。

それなのに今、ネルの口から当然のようにデータだのフェイズガンだの航宙艦だのという単語が飛び出したではないか。

私がそれについて尋ねると、ネルは少し困ったように首を傾げた。「説明すると長くなるんだけど、色々事情があって、私はタイネーブより、少しだけ宇宙のことを多く知っているんだ。先進惑星の軍人とも戦ったことがある。まあ、あれは私達が知っている『人』ではなかったけど」

それは、先ほど言っていた『バンデーン』とやらだろうか。

「バンデーン……確か、水棲魚類を祖とする人類ですね」

ウイニーの注釈が入るが、そんな人類がいるなどという話は聞いたことがなかった。

「あの、それで、あたしはどうして……」

リーシュの問いに、ネルの答えは簡潔だった。

「ミュリアもタイネーブもフェイズガンに即応できないし、ウイニーも不安がありそうだ。でも、あと一人術者が欲しい。こうして向かい合っているだけでも、あなたの施力が尋常じゃないのは分かる。戦闘用の紋章術は、持っていないのかい？」

「え……えっ」

「あ、あの、ネルさん、実はですね、リーシュさんは記憶を失ってまして、それで、仰ってるセリヨクとは紋章術を使う力のことですね？ リーシュさんは今のところ、相手の都合を考えずに人間を呼び出す以外のことをしたことがなくて、僕らが初めて出会ったときもカニミソから逃げ惑うしかできない人でしたから、とても戦闘は……」

戸惑うリーシュを庇っているつもりで全く庇えてないコロがネルに進言する。

私も概要としては同意見だった。リーシュが意外にも頑丈なのはメーアの頃から分かっていたが、それでも戦闘の場に出すとなると話は変わってくる。

「……いいえ、行くわ」

「リーシュさん！？ 危険ですよ！？ ムリしてケガしたら大変ですよ！」

「ううん。行きたいの。メーアでも、エスペランスでもあたしが星を救いたいって言ったのに、危険なことは全部みんなに任せて安全な艦に籠ってた。それは……無責任すぎると思う」「嫌味に取って欲しくないんだけど、役割分担というものがあるわ。できないことを無理してやるのは、責任の取り方としてはあまり褒められたものではないわよ」

これがミュリアなりの気遣いであることは、もう全員が分かっている。

リーシュももちろん悪意に取るなど無い。

「だとしても、今ネルに言われて思い出した……ううん、もしかしたら、自分で目を背けていたことがあるの、ミュリア、杖を貸してもらえる？」

リーシュはミュリアから杖を受け取ると、その先端に意識を集中する。

すぐに杖の先端から淡く青い光の粒子が放射され、それがミュリアとタイネーブの全身を

包み込んだ。

瞬きする間に、二人が偵察中の戦闘で負った軽傷の全てが塞がったではないか。

「治癒の紋章術！」

ウイニーの驚愕の声に、リーシュは照れくさそうに微笑む。

「何かね、できるみたい。あと、ミュリアほど強力じゃないけど、攻撃用の紋章術も一つだけ……シャイニーランサー……！」

「えっ、ちよっ！」

その声に慌てたのは、何故かフィデルだった。

リーシュのコールと共にフィデルは目にもとまらぬ速さで剣を抜き放ち、レクリエーションルームの空中に突如出現した光の矢を驚異的な身体能力で撃墜していくが、

「ああっ！そこは……！」

コロの悲鳴が、フィデルの努力があと一歩及ばなかったことを知らせてくれた。

出現した光の矢の一つが、レクリエーションルームの隅に積んであった資材コンテナの一つを貫いてしまったのだ。

「あっ」

リーシュは自分がやらかしたことに気付き顔を青ざめさせ、フィデルがルームの隅で力尽きたように崩れ落ちていた。

「と、とにかく、これであたしも戦闘の役に立てるわ！もちろん潜入に当たってはネルの指示にはきちんと従うわ！」

「まあ……うん、ほどほどに頼むよ」

ネルの声色に若干の不安が混じっていたように聞こえたのは、多分気のせいではあるまい。

「実は昔、同じことがあったんですよ。僕の幼馴染が習いたての呪印術を自信満々で披露して道場の壁に大穴を空けたことがあったんです。リーシュの雰囲気、そのときの幼馴染ともの凄く似てて嫌な予感が……ははは」

ファブリークの夜。

パルスタワーに向かう道すがら、私はミュリア達が手に入れたオフロードカーを運転しながら、何故リーシュの紋章術に誰よりも早く反応できたのかをフィデルに尋ねると、そんな返事が返ってきた。

「艦長もフィデルも、本当にごめん」

しおらしくしているリーシュを横目に、ネルは微笑む。

「まあ悪いことばかりじゃなかったよ。フィデルが戦えるのは見てすぐに分かったけど、あの術のお陰で『圧倒的に』戦えるってことが分かった。頼りにするよ」

「ええ、そこは任せて下さい。フェイズガンのような武器となら、もう何度も戦ったことがあります。油断はしませんが負けもしません」

自信たっぷりそう答えるフィデルを、ネルは少し不思議そうに見ていた。

「……ああ、何かね、私の知ってる奴に似てるなって思ったんだ」

私の視線に気づいたのか、ネルは尋ねる前からそう答えてくれた。

『もう間もなく、ネルさんが指定されたポイントです。艦長、皆さん、ご準備を』

すると、私の襟からコロの合図が聞こえて、私は車を止める。

空は曇って星も月も見えず、かといって文明の灯りも無い荒野を、まるで光があるかのごとく進んでゆくネルの後をなんとか追いかかる。

ようやくたどり着いた身を隠すのにちょうどよい岩陰からパルスタワーを見上げ、私は思わず唖った。

これまで見て来た物とは明らかに違う新しさ。

生身の体にも違和感を覚えさせるエネルギー総量。

こんなものを、正体不明の勢力は未開惑星に投下していたというのか。

「一体、どうしてこんなことをするのかしら」

リーシュも同じ感想を抱いたのか、怒りとも悲しみともつかぬ瞳で、タワーの偉容を見上げていた。

「静かに。見張りがいる。ちよつと手ごたえを確かめて来るよ」

言うが早い、ネルは音無き影となって地を走り、私達の潜む岩陰の少し向こうを通った哨戒部隊と思しき者達に接近する。

「速いですね」

フィデルがそう漏らす程、その手際は鮮やかだった。

3人固まって動いているはずの武装兵に、一切存在を悟られることなく一人ずつ無力化していった。

舞い戻った紅き影は、鋭く告げる。

「奴ら、通信機を携帯してる。上官からの通信に応えなかった場合、異常は感知されるだろう。手早く忍び込むよ」

「こ、殺したの？」

恐る恐る問うリーシュに、ネルは小さく微笑んだ。

「そういうのはお互い好みじゃないだろう？」

「……うん！」

暗闇の中でも、リーシュが嬉しそうに頷くのが手に取るように分かった。

タイネーブの言うことは誇張でも何でもなく、ネルの潜入技術は他の追隨を許さぬものだった。

かなりの深部に至るまで異常が発覚していないのは、ひとえにネルの『処理能力』と初めての場所であるにも関わらず、道をほとんど間違わなかった超常的な勘の働きだ。

「この建物は、外敵の侵入をあまり意識していない作りをしている。多分、この星の勢力なら水際で必ず食い止められるって自信があるんだよ。内部を利用する人間の利便性が最優先になってるからね。勘と言うほどのものじゃないさ」

ネルが謙遜ではなく、ただ淡々と事実を述べているだけに、恐ろしいものがある。

「だからこそ建てた奴の傲慢さも透けて見える。少しは外敵に怯えた構造にすればいいものを、つまりははつきりとこの星の人間を見下した作りでもあるってことさ」

「見下した、か……」

「フィデル？」

「僕の故郷でも、先進惑星の技術介入で、混乱と犠牲が沢山生まれたんです。今でこそ平和になりましたが、何かが一つ違えば、こんなことになっていたのかな。そう思うと、尚のこと、この塔を建てた連中の真意が知りたくまりました」

そういえば、クロノス事変が発覚する端緒の一つが、フェイクリードの国家間紛争に秘密裡にクロノスが介入したことだったはずだ。

政情不安に乗じて圧倒的な力を持つ者が陰で暗躍するファブリークの状況に、思うところがあるのだろう。

今日、暗躍する者達の謎の一端が紐解かれるのだろうか。

「案外、そうかもしれないよ。どうやらここは中枢階のようだ」

はっと顔を上げると、いつの間にか私達は、広く空間が取られたフロアにいた。

警備兵の姿がごくわずかなのは、先ほどもネルが言っていた通り、ここまで侵入されることは想定すらしていないからだろう。

「でも少し、動きが慌ただしい。多分、気絶させた警備兵の異常が確認されたんだろうね」  
コンピューターサーバー群の裏に身を蟄めながら、ネルが険しい顔をする。

「どうしますか。ざっと見た感じ、武装した人間はいなさそうです」

「人数は、10人くらいかしら。科学者とか、そんな感じの人ばかりね」

我々4人での制圧は、恐らく可能だろう。

武装した兵は二人だけ。私のフェイズガンとリーシユの紋章術でその二人を無力化すれば、残りは一見して明らかに軍事訓練を受けていない者ばかりだ。

フィデルとネルの力でどうとでもなるだろう。

それでも私は科学者と思いき者達の中に一人、異様な風体の男から目が離せないでいた。

高い上背、真っ白な長い髪。冷酷な鋭さを持った瞳の片方を眼帯で覆っている。

空間の中央で指示を出したり報告を受けたりしているところを見るに、この場の責任者のようだ。

「あいつを押さえれば、何とかなりますかね」

フィデルも、同じ男に気が付いたようだ。

「敵地の真ん中で敵の大将を人質に取るのはあまりスマートとは言えないが、全ての選択肢を排除しなければありだね。リーシュ、その場合は、いいね？」

「……分かった」

つまり、ここからは状況次第で相手の命を絶つことも起こり得るということだ。

リーシュも、事ここに至って流石に否は唱えなかった。

「とはいえ血を見なくて済むならそれに越したことは無い。奴が頭なら、護衛すらできない状況を作ってやればいいんだ。その点、さっきのリーシュの術はうってつけだよ」

ネルの言葉に、リーシュは頷いてミュリアの杖を握りしめる。

「私の合図で撃つんだ。他の人間には当てたくない」

リーシュが紋章力を高め、ネルがタイミングを伺う。

しばらくして、何やら異常を知らせに来たらしい新たな科学者がやってきて、俄かに騒がしくなる。

「今だ」

ネルの合図でリーシュが光の矢を放つ紋章術を発動させる。

フロア内の全員が何らかの対応に迫られて男から離れた瞬間、シャイニーランサーの光の矢が轟音と共に男を囲むように突き立った。

「……」

男を含め、全員が何が起こったか分からない、と動揺した虚を突き、私は物陰から飛び出し警備兵一人のフェイスガンが無効化、もう一人の警備兵のフェイスガンは、フィデルの神速の一振りでも無残にも爆発する。

「全員動くな！ この階層は既に私達の制圧下にある！」

光の矢の隙間から男の喉に差し出されるのは、混乱の最中に誰に気づかれることなく男に接近したネルの幅広の短刀であった。

「ぐ……」

喉元に突きつけられた殺意に男が呻き、それを見たネルが新たに声を上げる。

「コロ！ ミュリア！ 中枢の制圧を完了した。増援を頼む！」

『りよ、了解しました！ ミュリアさん、ミュリアさん！』

ネルの指示で、私の襟元のデバイスからコロの慌てた音声が発せられ、男が目だけで私を見た。

私も、男の目を正面から見た。

そして気づいた。

周囲の科学者達と違い、この男は今、さほど慌てていない。

「全員動くな。こいつらの指示に従え。まだ幾人か潜んでいるようだ」

その証拠に、色めき立つ部下達を、深みのある声で静めてみせた。

突然現れた光の矢の檻や武装集団の驚きからも、既に立ち直っているようだ。

「政府の犬……ではないな。手際が良すぎるし、バリエーション豊かな人材が揃っているよ  
うだ……どこの星の者だ。何故我々ランビュランスに仇を為す」

『ランビュランス……？ 惑星名、組織名、国家名、いずれもデータベースに無い名称です』

「自分の胸に聞いてみなさい！ 宇宙に、罪の無い未開惑星に仇を為しているのはあなた達  
でしょう！」

杖を構えたまま、リーシュが男の前に姿を見せる。

「一体何のためにこんな迷惑な塔を建てて回っているのか、全部話してもらおうよ」

リーシュの光の矢とネルの刃、私のフェイスガンに囲まれて、男の状況は一見絶望的に見  
える。

だが男は既に、余裕の笑みすら浮かべていた。

「一步届かん。お前達程度には捕まらん」

「っ！ 妙な真似はやめな。あんたは今……」

『ネルさん！ 離れて下さい！ 艦長！ ファイデルさんも！ 転送信号を検知しました！』

コロの警告とともに、私は全員にこの場の人間から離れるように指示する。

それと同時に光の檻に閉じ込められた男も、フロアにいる科学者も、突然青い光に包まれ  
始めた。

「くっ！」

「良い星であっただけに残念だ。今後は蠅に群がられぬよう、警戒するでしょう」

「ま、待ちなさい！」

リーシュの制止を聞くような相手ではない。

光の矢の檻とネルの刃に晒された男は、次の瞬間、私達の目の前から忽然と姿を消してし  
まったのだった。

※

ランビュランス、パルスタワー。

私達がファブリークで得たものは、少ないように見えるが、とても大きなものでもあった。

まず、星々を蝕む謎の塔の『新品』を、丸ごと調査する時間を手に入れた。

そしてランビュランスという名の組織が、最低でも銀河連邦の先進惑星と同程度の技術を



有する存在であることを把握した。

首魁と思しき男を逃がしたのは痛い、我が艦の優秀なAIは、衛星軌道上からある星系に向けて亜空間ワープを行った航宙艦の航跡を捕捉していた。

「悔しいなあ……目の前で逃げられちゃうなんて」

「僕のミスです。先進惑星勢力と分かった時点で衛星軌道上に目を向けるべきでした。彼らの航宙艦も、僕らと同じように、タワーか近隣のどこかに着艦しているものとはかり……」

「コロのせいじゃないわよ。それに、追いかけたところでこの艦、パフォーマンスが回復していないでしょう。むしろ追わなくて正解。航跡を捕捉したんだから上出来じゃない」

「うう、ミュリアさんが優しい……これはきつと流星雨が降る前兆あわわわっ！」

余計なことを言わなければいいのに、と思う反面、あいつ分かってやってるんじゃないか、と思うことが最近よくある。

「どうもあの転送つてのは好きになれないね。何と言うかこう、不躰な技術だ」  
ネルの感想は正しい。

連邦でも、惑星への転送降下、惑星からの転送収容には実はかなり厳密に定められたルールがある。

そうでなければ、それこそ窃盗、諜報、暗殺、何もかもが思いのままだ。

だからこそ先進惑星の主要都市には必ず、都市全域を完全にカバーする転送妨害装置が存在する。

ファブリークには当然そんな設備は無いが、パルスタワーを調べると、転送妨害装置を設置しようとしていた痕跡が発見された。

他勢力のファブリークへの着陸を妨害しようとしたのか、ファブリークの技術を封じようとしたのかは分からない。

だが一つ分かるのは、ランビュランスがパルスタワーを設置する目的は、単に未開惑星を征服し、資源を収奪することだけではないということだ。

それだけなら、わざわざファブリークのような、ある程度技術が進歩した星の政治勢力に干渉してまでこんな事業を行う必要が無い。

土壌を変性する技術があるのだから、どこか生物のいない、有害な大気のない岩石惑星の地面を適当に掘ればいいだけの話だ。

それではいけない理由が、ランビュランスにはある。

「とりあえず、建設途中のパルスタワーから根こそぎエネルギーユニットを引き抜いて、引き出せるデータは全部出しましたし、後はさっさとこの星からオサラバするよりありませんね。政情不安が酷いこの場所では、船を修理するどころではありませんし」

「それだけ聞くと、あたし達もほとんど泥棒みたいに聞こえるけど」

コロの方針を聞いてリーシュは苦笑するが、それ以外に道が無いのも間違いない。

タワーを解体するのは私達には不可能だし、アフターケアが全くできない状況では、政府軍と反政府ゲリラの仲立ちをすることもできない。

「こう考えると文明のある星に降りるのも考えものです。だって今後、もし連邦先進惑星並みの文明を持つ星と接触したら、絶対に僕らの背景を追及されるでしょう。でも艦長にも僕にも、連邦を代表する権限はありませんよね」

フィデルの言葉に、私は頷く。

元々私とコロとこの艦は連邦勢力圏を拡大することを目的としたGF隊の一員だ。

だが未開惑星保護条約を初めとした種々の法律によってできることはかなり制限されており、本来どのような事情があろうと、ファーストコンタクトの権限は一切与えられていない。

「一応僕達の現状は連邦法の判例にある非常事態であると認められますが、艦長達の安全のためにも、先進惑星だからといって安易に接触するのは控えた方が良いでしょうね」

「それで、どうするの？」

ミュリアの問いに、私は一度だけリーシュを見て、告げた。

謎の勢力、ランビュランス所属と思われる航宙艦を追跡する。

「よろしいですね？ 地球に真っ直ぐ向かう航路から外れることになりましたが」

そんなことは今更だし、地球までの距離を考えれば、あまりに些細な誤差である。もちろん相手は先進惑星の組織である。

たった一艦で行動している以上、無茶はしない。

だが地球に帰るつもりがある以上、先進惑星の無法は可能な限り観察し、詳細を持ち帰る必要がある。

そしてそれは、銀河連邦GF隊の任務と何ら矛盾するものではない。

「行きましょう！ ランビュランスを追って！」

リーシュの合図とともに、艦が浮上する。

フィデルと、ミュリアと、タイネーブと、ウイニーと、ネル。

いつの間にか随分と増えた仲間と共に、私達は星の海へと戻ってきた。

「……」

スクリーンから消えるファブリークの映像を難しい顔で見送っていたフィデルを見て、ネルが尋ねる。

「フィデル？ どうしたんだい？」

「いや、ファブリークが、ランビュランスの介入に負けず、できるだけ早く平和になってくれればいいなって」

「……そうだね。私の故郷も、ほんの少し前まで大きな戦争をしていたからその気持ちは分かる。宇宙からの介入でなし崩し的に平和はもたらされたけど、それまでに生まれた悲劇を清算するには全然足りない。むしろ、平和になってからこそが本番なんだろうね」

「ああ……」

フィデルは嘆息する。

「それで平和がもたらされることも、あるんですね」

「フィデル……」

「大丈夫です。やっぱり僕は、まだまだフェイクリードの剣術師範以上の視野を持っていない。連邦軍人になるなら、もっと広い視野を持てるようにならなきゃ」

若い彼の、あまりに大きな背景に対し、GF隊で平和に倦んでいた私にかけてやれる言葉は少ない。

「艦長？」

私が見ていることに気づいたのか、フィデルが声をかけてきた。

私は少し悩んでから、連邦士官を拝命したばかりの頃、情熱と現実の狭間で行き場を失っていた私の心をもっと直ぐに任務に向い合わせてくれた、上官の言葉をそのまま贈る。

今は退官して地球にいるはずの上官は、こう言ったのだ。

友を信じろ。そして信じた分だけ、自分を信じてやれ。それこそが、君達が未来へと進んでいくために必要な力なのだ、と。

これからも君達の成長を見守らせてもらうよ、と最後に笑顔で強く背中を叩かれた痛みは、未だに私を前へ前へと進ませてくれている。

「友を信じて、信じた分だけ自分を……か」

フィデルには、同じフェイクリードから連邦に先任留学生としてやってきた仲間がいる。

故郷を同じくする彼らはきつと、同じように研鑽するフィデルを信じているはずだ。

その証拠に今のフィデルの瞳には、私ではなくきつと彼の故郷の仲間達の姿が映っている。

少しは、若い後輩の背中を押せただろうか。

「ああん！」

すると突然、ネルの足元でコロが派手に転がって悲鳴を上げた。

「悪いねコロ。足元に來てるのに気が付かなかった。何でもないよ、艦長」

ネルがひらひらと手を振りそう言うので、私は首を傾げつつも航路選定の作業に戻る。

ウィニーから、私がフィデルに伝えた言葉に茶々を入れようとしたコロを、ネルが蹴飛ばして止めたというのを聞いたのは、次の宙域へのワープロドライブが安定した頃のことだった。